

筑波大学審査学位論文（博士）

論文題目：

ジャスト・コミュニティ・アプローチによる道德教育の拡充に関する研究  
—コールバーグとその後継の理論と実践の展開に着目して—

人間総合科学研究科学校教育学専攻

氏名： 小林 将太

## 論文概要

### ジャスト・コミュニティ・アプローチによる道德教育の拡充に関する研究 —コールバーグとその後継の理論と実践の展開に着目して—

小林 将太

本研究は、コールバーグ (Kohlberg, L., 1927-1987) が提唱したジャスト・コミュニティ・アプローチ (Just Community approach) について、彼とその後継論者による理論と実践の展開に着目して、その特質と位置づけを解明することで、道德教育における全面主義と授業との関連づけという課題に取り組み、道德教育の拡充を図ることを目的とした。

序章では、問題の所在や研究の目的について述べた。ジャスト・コミュニティは、現代の道德教育における全面主義と授業との関連づけについて展望する上でなお参考になるが、その全面主義的性格が新しい人格教育へと継承されたと考えられている点は、両者の間の基本的な教育観の違いから疑問である。そこで、晩年のコールバーグによるジャスト・コミュニティの理論的な強化の営為と、彼の実践に現れる諸課題への応答として捉えられる後継の理論と実践について解明することを研究課題とする必要性を示した。そして、先行研究の検討から、研究対象とするジャスト・コミュニティの条件を同定するとともに、上述した研究課題への取り組みが十分でないことを明らかにした。

第1章では、青年期以降一貫して正義の問題を追究したコールバーグが、正義推論の道德性発達段階理論の研究に始まり、その応用としてジレンマ・ディスカッション (Dilemma Discussion) を開発するも「心理学者の誤謬」を反省し、キブツ (kibbutz) との出会いからデュルケム (Durkheim, É., 1858-1917) の集団主義教育を再評価し、矯正教育の研究を経て、学校や子どもの「現実生活」に取り組む新たなアプローチを構想するに至ったという、ジャスト・コミュニティの成立過程を明らかにした。

第2章では、まずジャスト・コミュニティの基本構造について、コールバーグの理論構築の過程をふまえて解明した。ジャスト・コミュニティの目的に関しては、責任の判断に関する研究の進展によって道德的文化すなわち道德的雰囲気の発展と簡潔に表現されるに至ったこと、方法に関しては彼の現実社会への悲観から、正と善の統合を見出したキブツを範とする参加民主主義に基づく学校運営に集約されていったことを明らかにした。また、その学校運営において教師は民主的討議の促進者 (facilitator) である以上に、学校がめざす理想や価値を主張する唱道者 (advocate) であること、唱道の内容は学校の道德的雰囲気を分析することで導き出せることを指摘した。その上で、段階理論と道德的雰囲気の理論では捉えられない実践に現れる諸課題について検討した。クラスター校 (Cluster School) での放校の事例では、道德的雰囲気が発展途上である時には放校の回避が難しいという意思決定に関する問題が、SAS (Scarsdale Alternative School) での萎縮の事例では段階発達への圧力を感じて生徒が萎縮したこと自体を議論した結果、今度は唱道に対する萎縮が生じたという生徒—教師関係に関する問題が明らかになった。

第3章と第4章では、実践との往還の中で進められた晩年のコールバーグの研究にジャスト・コミュニティの理論的な強化の営為を見出すことで、主にその道德教育としての効果や目的に関する解明に取り組んだ。

第3章では、認知発達のアプローチにおける自我発達の理論を取り上げ、その観点からジャスト・コミュニティにおける授業の役割について考察した。まず、コールバーグが段階理論を正義推論の発達理論へと精緻化させた結果、ピアジェ (Piaget, J., 1896-1980) を批判して自身の研究全体を包括する単一の理論的視点の必要性を認識したことを指摘した。次に、この単一の理論的視点を与える自我発達の理論を検討し、認知発達のアプローチにおいてその観点から道德性を捉える必要性を明らかにした。続けて、晩年の彼が自我発達を教育の目的に明確に位置づけたことを確認した上で、学校と学校外の社会それぞれに関する社会的認知を結び付けて自己を再構築させる自我発達への契機として授業が位置づけられることを指摘した。そして、自我発達のための授業をホルト社会科の第二版をてがかりに仮説的に構成することで、学校運営から得た価値認識について授業で熟考し、学校をこえた社会との関係でその認識を捉え直す時、学校生活を通じた学習が般化されるという道筋を具体的に示した。

第4章では、認知発達のアプローチにおける社会化の機製の解明を試みるとともに、ジャスト・コミュニティにおける社会化の機制について教師の役割に着目して考察した。はじめに、コールバーグの社会化への課題意識が、なぜ利己的な子どもが規範に従う動機づけを獲得するのかにあることを指摘した。次に、彼がボールドウィン (Baldwin, J. M., 1861-1934) の理論に依拠して、社会化の機制について他者が規則に「従う自己」であるとわかることが子どもを利己性の抑制へと導くと考えていることを明らかにした。また、彼によるボールドウィンへの依拠や参照について広く検討することで、彼が社会化に関する課題意識に応えるべく、最終的に道德的自己 (moral self) の発達について探究を進めていたことを確認した。以上をふまえ、ジャスト・コミュニティにおける社会化の機制について考察した結果、唱道者の役割において教師は生徒に「従う自己」として認識される必要があること、また子どもが学校を価値づけられない場合には促進者の役割を重視する必要があることを導き出した。

第5章と第6章では、コールバーグの後継に位置づく理論と実践について考察を進めることで、主にジャスト・コミュニティの方法に関する解明に取り組んだ。

第5章では、学校内学校 (School-Within-a-School) でのジャスト・コミュニティ実践とそれを主導したモシャー (Mosher, R. L., 1928-1998) の理論について検討した。まず、モシャーがデューイ (Dewey, J., 1859-1952) に依拠して、オールラウンドな発達を促す方法として学校民主主義を捉え、生徒の自治を尊重したことを明らかにした。次に、学校内学校での実践をふまえて展開された代表民主主義的学校運営も含め、実践の特徴や成果について明らかにした上で、意思決定や生徒－教師関係に関わる実践の特徴を析出した。そして、以上をふまえてコールバーグの実践に現れる諸課題の改善や解決に向けて考察した結果、意思決定に関する問題では、唱道者の葛藤を解消するために道德的雰囲気発展を過度に重視しな

いなどの改善方法を提案した。生徒－教師関係に関する問題に対しては、教師が有する学業上の権威と権力の源泉の生徒との共有に加え、組織に可変性をもたせて探究を行う唱道を可能にすることを提案した。

第6章では、第5章の考察で残された参加民主主義に基づく学校運営とそこでの教師の役割をめぐる課題を念頭に置きつつ、ドイツ語圏でのジャスト・コミュニティの実践とその中心を担うオーザー (Oser, F. K., 1937-) の理論について検討した。まず、オーザーがジャスト・コミュニティに意思決定の正しさに関する課題を見出し、民主的議論それ自体のあり方を追究していることを指摘した。次に、彼がハーバーマス (Habermas, J., 1929-) の討議倫理に依拠して理論化する道徳的討議とそれを追求するための教師のエートスについて検討し、ジャスト・コミュニティは「完全な討議」のエートスによって道徳的討議の実現へと近づくと考えられていることを明らかにした。続けて、ドイツ語圏でのジャスト・コミュニティの実践の特質が、そこでの民主的議論を通して道徳的討議を追求する点にあることを論じた。以上をふまえ、彼の理論構築についてさらに考察を進めた結果、教師をめぐる諸課題についての彼の入念な議論と理論化が、コールバーグの実践に現れる諸課題に対してモシャールの理論と実践から得られる示唆を強化するものであること、および彼が制度としての学校を強調することが、エートスに関する探究とも関連して、ジャスト・コミュニティの実践可能性という課題を顕在化させていることを指摘した。

終章では、本研究を概括した上で、ジャスト・コミュニティの特質と位置づけの解明を試みるとともに、そこから明らかになる道徳教育の拡充に向けた課題について考察した。ジャスト・コミュニティの特質は、参加民主主義に基づく学校運営を行うことで子どもの道徳的成長を理論的に一貫したかたちで多面的に促すことができることにあると結論づけられるが、それはコールバーグが現実社会への悲観から、学校コミュニティのみで道徳教育を完結させようとした結果であると解釈することもできる。その結果、ジャスト・コミュニティにおける参加民主主義には課題が少なくないが、その解決の可能性は民主主義を重視する後継論者の理論と実践に見出すことができた。このような特質を有するジャスト・コミュニティは、正義やケアなど社会的に実現されるべき価値を中心に位置づけ、その限りにおいて徳としての道徳的価値に正当性を与えるという価値の捉え方において、道徳的価値の普遍性を主張する人格教育とは一線を画する道徳教育のアプローチであると言える。以上から本研究は、ジャスト・コミュニティから示唆される道徳教育の拡充に向けた課題として、全面主義において自明となっている道徳的価値を目標に据えることに対してあえて疑問をもつこと、全成員による意味ある参画によってコミュニティとしての学校が実現しようとする価値を民主的に決定し、その価値との関連で道徳的価値に正当性を付与すること、教師は自らを発問者や授業者の位置づけに留めず、価値の実現に向けて全面主義を構想できる学校コミュニティの一員であることなどを提起することができた。